

| 科目名 | 現代世界と平和 | 開講学期 | 後期 |
|----------|--|------|-----|
| 担当教員 | 河野 健一 | 単位数 | 2単位 |
| 授業概要とテーマ | <p>ポスト冷戦の21世紀に入った現在も、各地で武力紛争やテロ、飢餓、エイズや新型インフルエンザなど感染症の拡大によって多くの命が失われている。北朝鮮の核実験に代表されるように大量破壊兵器の拡散は地域の緊張を高め、地球温暖化をはじめとする環境破壊の進行は人類の存亡にかかわる脅威となっている。どうすれば人々が安心して暮らせる平和な世界を構築できるのか。そのために、国際社会、日本、私たち市民は何をすべきであり、何ができるのか。こうした問題意識に立って世界と地域の安定及び平和にかかわるカレントなテーマを取り上げ、多様な角度から考えるのが授業の趣旨である。現代史の最先端で生じている事象を教材とした「平和講座」であり、「平和学入門」である。</p> <p>授業は国際問題の専門研究者、現地事情に精通したジャーナリスト、NGOの活動家など学外から招いた講師による連続講演方式で実施する。被爆地・長崎で行う平和講座であるので、最初の3-4回程度は被爆者の体験談など核にかかわるテーマとする。</p> | | |
| 到達目標 | <p>戦争や民族・宗教紛争だけでなく、地球温暖化、食糧やエネルギー問題、貧困や飢餓、感染症などを含む広義の安全保障概念に立って、世界や地域の平和と安定を脅かす様々な問題に目を開き、自ら考える力を身に着ける。</p> | | |
| 授業計画 | <p>世界の動きに即応するため、講座内容は年ごとに刷新する。グローバル化の時代、一国平和主義はもはや成り立たない。核の拡散、食糧やエネルギーをめぐる利害対立、感染症は国境を超えて平和と人命を脅かす。地球温暖化は人類そのものの存続にかかわる。こうした問題に効果的に対応するには国境を超えた協力が不可欠である。紛争後の復興や平和定着、エイズ対策などでは、国際機関や各国政府だけでなく、NGOが大きな役割を果たすようになった。学外から第一線で活躍している専門家を招いて講義してもらう予定だが、後期の授業であるため、外部講師の招聘交渉は7月以降になる。ここに記している授業計画はあくまで暫定的なものであり、招聘交渉がまとまった段階で順次、確定的な講義スケジュールを書き入れる。また、講師の都合により、講義スケジュールを途中で変更することもある。</p> <p>途中で試験を行い、レポートも提出してもらう。講義を漫然と聞き流さずノートをしっかり取り、関係の新聞記事や本でテーマについての知見を深め、試験やレポートに反映させる自主努力が不可欠である。試験に持ち込めるのは、自分で講義内容や感想を書きとめたノートのみとする。</p> <p>遅刻や授業中の教室の出入り、私語、居眠りは厳禁。入室前に携帯電話の電源は切っておくこと。</p> <p>毎回、講師との質疑応答の時間を設けるので、積極的に質問してほしい。</p> | | |
| 第1回 | 講義の趣旨説明と履修上の留意事項（河野によるオリエンテーション）。 | | |
| 第2回 | 「原爆の業火を生き延びて」――長崎の被爆者の証言。・ 小峯秀孝氏 | | |
| 第3回 | 海外のヒバクシャを救えー国際医療支援の現場から・ 長崎大学医歯薬学研究科 高村昇教授 | | |
| 第4回 | メディアは反核・平和運動をどう報じてきたか・ 長崎新聞社論説委員長 高橋信雄氏 | | |
| 第5回 | 核廃絶の願いはどこまで世界に届いたかーニューヨークの核拡散防止条約再検討会議を振り返って・ 長崎原爆病院院長 朝長万左男氏 | | |
| 第6回 | 戦乱のアフガニスタンで医療支援と農民の生活支援に取り組む・ NGO「ペシャワール会」事務局長 福元満治氏 | | |
| 第7回 | 長崎の鐘は今日も鳴る・・・永井隆博士の残したメッセージ・ 永井隆記念館館長 永井徳三郎氏 | | |
| 第8回 | 緊迫の朝鮮半島情勢・ 駐福岡大韓民国総領事館総領事 趙廷元氏 | | |
| 第9回 | 海の安全保障と海上自衛隊の役割・ 元海上自衛隊呉総監部総監 仲摩徹彌氏 | | |
| 第10回 | 沖縄のアメリカ軍基地問題・ 琉球放送株式会社 嘉陽順氏 | | |
| 第11回 | 近くて遠い隣国ー日露関係の現状と展望・ 毎日新聞社外信部副部長 大木俊治氏 | | |
| 第12回 | 中間テスト | | |
| 第13回 | 国際法と国際機関が国際平和に果たす役割・ 筑波大学大学院教授 田島裕氏 | | |
| 第14回 | 人間の安全保障を考えるーアフリカの農村での母子保健活動から・ 看護栄養学部助教 岩永洋子氏 | | |
| 第15回 | 欧州統合の歴史的意味と国際平和への貢献ードイツの視点から・ 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館副領事 シュテファン・ビーダーマン氏 | | |

| | |
|-----------------|---|
| <p>学生に対する評価</p> | <p>【成績評価の基準】 平成19年度以前入学生 A…80～100点 B…70～79点 C…60～69点 D…59点以下</p> <p>平成20年度以降入学生 A（秀）…90～100点 B（優）…80～89点 C（良）…70～79点 D（可）…60～69点 F（不可）…59点以下</p> <p>【成績評価の方法】 毎回、出席をとる。授業の理解度を検証するため12月に中間テストを行う。1、2月の講義についてはレポートを提出してもらう。出席点、授業への熱意、試験の点、レポートの内容を総合的に判定して成績評価を行う。 正当な理由のない欠席は1回について10点減点、3回目以降は15点減点する。従って4回以上欠席すれば自動的に失格となる。レポート不提出も不合格とする。授業に臨む態度が悪い者は減点し、受講停止もあり得る。</p> |
| <p>テキスト</p> | <p>特になし。学外講師にも講義のレジュメを準備するよう要請する。</p> |
| <p>参考書</p> | <p>現代史の最先端で進行中のカレントなテーマについて話してもらうことが多いので、日頃から新聞やテレビのニュース番組などで内外の動きをしっかりとフォローしておくことが大切。講義に先立って、テーマに関連する本を図書館で探して読んでおくことが望ましい。</p> |
| <p>履修上の注意等</p> | <p>多忙な専門家を東京など遠方から講師に招いて実施する授業だから、マナーを守って真摯な姿勢で臨んでほしい。昨年の受講生の中には、鼾をかいて居眠りしたり、他の学生の迷惑も考えずに中断なく私語をする者が複数いたが、そうした人は受講しないしてほしい。態度が特に悪く、迷惑行為を繰り返す者は受講停止にする。 旺盛な好奇心を持ってテーマとかかわり、講義を自らを豊かにするきっかけにもらいたい。</p> |